



Title	タイを学ぶ本第15回 : 自著を語る「現代タイの社会的排除 : 教育、医療、社会参加の機会を求めて」櫻井義秀, 道信良子編
Author(s)	櫻井, 義秀; Sakurai, Yoshihide
Citation	タイ国情報, 44(3), 85-93
Issue Date	2010-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47965
Type	journal article
File Information	Thai_Jyoho_sakurai.pdf



自著を語る

— タイを学ぶ本 第15回 —

『現代タイの社会的排除

教育、医療、社会参加の機会を求めて』 櫻井義秀・道信良子編

北海道大学大学院文学研究科教授

櫻井 義秀

< 本書目次 >

はじめに (櫻井義秀・道信良子)

第Ⅰ部 社会的排除と包摂の視点

第一章 タイ社会における排除の構造
と社会的包摂 (櫻井義秀)第二章 タイにおける医療・教育・社会
参加の機会の現状と課題
(道信良子)

第Ⅱ部 個人・家族による自力更生

第三章 ラオスの移動労働者—世界労働
市場と移動労働者の生活戦
略 (清川 梢)第四章 タイの国際結婚定住者—上昇
婚戦略としての国際結婚 (テ
ィラポン・クルプラントン)

第Ⅲ部 地域社会と観光政策による包摂

第五章 北タイの山地民—エコツーリズム (鈴木 雅)

第六章 東北タイの農村女性—文化ツーリズム (ラッチャノック・チャムナンマック)

第Ⅳ部 NGO 地域行政による包摂

第七章 ストリート・チルドレン—行政・NGO のサポート (ジュタティップ・スチャ
リクル)

第八章 ゴミ収集人—包括的ごみ管理体制の構築 (ソムキッド・タップティム)

第Ⅴ部 公共的社会組織による包摂

第九章 グローバル企業による公衆衛生—企業の安全衛生管理責任という観点から
(道信良子)

第一〇章 タイにおける継続型高等教育の現状と評価 (櫻井義秀)

おわりに (櫻井義秀・道信良子)、 あとがき、 参考文献

著者紹介

1961年生 山形県出身

北海道大学大学院文学研究科博士課程中退、
北海道大学大学院文学研究科教授 (社会シス
テム科学講座)

専 門 : 宗教社会学

研究課題 : タイ地域研究、宗教社会学等

主な著書 :

『東北タイの開発と文化再編』2005

『「カルト」を問い直す』2006,

『よく分かる宗教社会学』(編著)2007

『東北タイの開発僧—宗教と社会貢献』2008

『霊と金—スピリチュアル・ビジネスの構造』

『カルトとスピリチュアリティ』(編著)2009

『社会貢献する宗教』(編著)2009

『統一教会—日本宣教の戦略と韓日祝福』(共著)

『死者の結婚—祖先崇拜とシャーマニズム』

(編著)2010

この経緯を知っている人は、社会的排除／包摂の議論を、福祉国家「以後」の社会発展段階にない途上国・中進国で展開することに違和感を覚えるかもしれない。途上国においては、飢えや病、紛争に直接さらされる貧困が今なお存在するし、社会的排除は雇用 - 福祉の領域ではなく、市民権の制限、民族・性による差別、労働者の搾取等に顕著である。そのため、途上国では、社会開発の議論の方が社会的排除／包摂の議論よりも有効ではないかという考え方もあろう。

問題は、中進国となったタイ社会では、どちらの概念がより有効であろうかということである。筆者は、社会的排除／包摂の概念で現状分析や施策の問題を考察してもいいのではないかと考える。その理由を、これまでの研究の道筋から簡単に述べてみたい。

2. 開発の時代

筆者は本書を執筆する以前に、『東北タイの開発と文化再編』（北海道大学図書刊行会、2005年）、『東北タイの開発僧 - 宗教と社会貢献』（梓出版社、2008年）という書籍を刊行している。

この二冊は、東北タイに20年来通いながら、政府による開発政策と商品経済の進展によって、農村社会がどのように変貌しているのかを記録した書籍だった。「開発」を主体化された農民達は、競い合うように高床式の家屋1階部分を煉瓦やコンクリートで囲って水浴び場やトイレを家の中に作った。オートバイからピックアップトラック、家電製品を所有することが豊かさだった。子供達には中等・高等教育を与える。彼等はタイの工業や都市の発展を支える出稼ぎ労働者にもなれば、消費者にもなり、さらなる社会発展を牽引する次世代の若者を輩出してきた。

もちろん、開発主義や経済発展の光と影の部分はある。1980 - 90年代のタイでは、収入と耐久消費財の保有によって規定されるような「豊かさ」を疑うオルターナティブな社会発展論も出てきた。筆者も「開発」の時代を生きるタイの人々がどのような自画像を描こうとしているのかが気になって、農業専従者、出稼ぎ者、地域開発NGOから地域開発を志した僧侶にまで話を聞いて調査を進めた。「開発」は地域の課題だったし、私自身の課題でもあった。

筆者がタイ研究に首を突っ込んだのは、20数年前に東北タイの中学生に奨学金を送るNGOに関わったことがきっかけである。当時、教育（人的投資）が地域開発の手段になると考えられていた。年間1万円の学資を送るだけで中学生になれる子供達が少なくなかった。政府であれ民間であれ、日本人も「開発援助」の時代を生きていたということになる。

さて、「開発」の主体は分かった。では、開発の対象は何か。誰に働きかけるのか。率直に言えば、未開発＝貧困、不衛生、非識字という状態を問題化し、経済社会に適合的な学びと労働を身体化していない人々に働きかけるということになるだろうか。文化の固有性＝価値が未開発／低開発なものとなれば、介入の対象となったことに対して、文化や権力を研究

する人々は違和感を禁じえないだろう。しかし、消費文化的「豊か」であっても生活の安定性・利便性を向上させたい、快適に過ごしたいという人々の願いは誰しも否定できない。そうした欲求に枠を課さないことで社会は経済発展してきたことも確かである。タイは開発に成功した。

とはいえ、このような開発／発展によって未開発の状態よりもさらに生活環境が悪化した人々がいる。地域の商品経済化による農民層の階層分解、生態系の悪化による生業の破壊、資本や政治権力による人権・社会権の侵害等が指摘されてきた。そうした社会問題は開発／発展の歪みというよりも、資本力・権力のあるものがないものを利用して豊かになる資本主義に不可避の問題である。だからこそ、「だれでも持っている者にはさらに与えられて豊かになるが、持っていない者からはその持っているものまでも取り去られることになるからだ（マタイによる福音書 25 章 29 節）」とならないように、資本と権力を制御する仕組みが必要である。「経済」と「政治」に加えて、社会が連帯していくための仕組みや仕掛けがいる。

3. 社会的排除を不当とみなす時代

タイでは、サリット政権以後、「王権」「仏教」「タイ民族」というシンボルがタイ社会の統合を果たしてきた。貴族であれ、軍であれ、資本家であっても、政治・経済的力を文化的力に転換しなくては支配の正統性を得られなかったといってもよい。1990年代に入って伝統的な支配／統治でやりくりしてきた政治は、徐々に国民（市民権を持った選挙民）の選択に依存する性格（民主化の度合い）を強めてきた。開発主義による経済成長、憲法制定による市民権の確立、経済的繁栄の分配が国民の関心事になった。タックシン元首相は権力の源泉を選挙民の選択においたがゆえに（もちろん財閥企業社長さながら、競合相手には無慈悲な仕打ちで報いたろうし）、高貴さや徳をもって統治する／されることに名分を置くタイ社会から拒絶されたのかもしれない。

2006年以降、「黄色シャツ」と「赤シャツ」陣営の対立、その舞台裏にうごめく人たち（「黒シャツ」といった人々含めて）をニュースで見ていると思うのは、社会的紐帯の源泉となるシンボルと言説、社会的緊張を緩和する「のりしろ」が、タイからなくなったのではないかということだ。つまり、自分たちの利害を代議制によって議会に届け、調停を図る政治よりも、直接的な利害をもっともらしい理念に糊塗して表明し、不満は直接行動で解決を目指す。それが、もはや権力者だけのことではなく、そこまで不満をため込んでいる社会層がいるのではないか。もちろん、権力者同士の争いが、地域間の葛藤（都市と農村）、階層間の葛藤（新中間層と農民）を利用しながら（一部反映しながら）なされているという見方にも肯けるころはあるが、それだけと見てよいのだろうか。

現代タイの社会問題は、飢餓に苦しめられるといった貧困、医療・教育の絶対的未充足、甚だしい階層・地域間格差ではない。多くの人々にとって問題は、社会的富の再配分をめ

ぐる利害の対立であり、経済・政治的な利害を調停する理念と仕組みを形成していくことに見通しが見つからないことへの不安、いらだちが表明されているのではないだろうか。民主化の経験を経て発達したメディア社会に生活していれば、相対的な剥奪感が強められる。選挙を通じた政治への参加や労働を通じた経済活動への参加、及び、市民権を承認された上で地域コミュニティへの参加を、当然と見なす時代になっていると思われる。

社会的排除を問題化し、不当な扱いを受けている社会層を全体社会に包摂する仕組みをいかに構築するかが、現代タイ社会の課題となっていると筆者は考えている。サリット以来のタイ的国民国家形成に人々を動員する、或いは商品経済化の過程に人々を消費の主体として位置づけるという包摂は現在も進行中である。しかし、それに加えて新たな包摂の理念や仕組み作りが欠かせないのではないか。

以上のような問題意識から、社会的排除／包摂の議論を現代タイ社会に適用することにした。

4. 排除された人々と包摂の施策

本書で扱う社会層は、声高に社会的排除の問題を指摘し、処遇の改善を力でアピールするような人々ではない。だから、「3.」で述べた不当性を主張する社会運動や政治運動に関わる人々を扱ったものではない。従来、社会開発や社会福祉のターゲットとなった社会層や地域の人々である。しかし、このような人たちを行政的な統治対象、社会政策の被支援層として見るのではなく、排除されている状況から脱却して、社会への参加を求めている主体として見ていこうと考えた。いわゆる「上から目線」で貧困や社会病理的な現象を指摘するのではなく、そうした状況を生き抜いている人々の思いを声として拾いあげ、こうした人たちがタイ社会に主体的に関わっていく方法や施策の試みを、具体的にフォローしようと考えたのである。

ここで本書の問題構成の説明を切り上げ、編者・執筆者たちの紹介に移りたい。

共編者の道信良子は医療人類学・公衆衛生学を専門とし、北タイの HIV・エイズ感染の問題に取り組んできた。筆者と道信は札幌市内の大学にそれぞれ勤務していることから共同の研究会を企画し、そこに参加した筆者の大学院生（日本人 2 名とタイ人 2 名）、コーンケン大学から交換留学で来日した 2 名のタイの大学院生たちにも執筆に加わってもらった。それぞれの研究課題に即しながら、現代タイの社会的排除に相当する社会現象と社会問題を描いている。

本書では、日本人の研究者含めて、全員がタイ地域研究を専門とするが、それは地域のコンテクストに通じているという強みであるものの、社会的包摂を政策論として議論することは難しい仕事であった。しかし、地域研究者に特有の、具体的な人々の生活や地域社会および文化の細部へのこだわりによってこそ、一国単位の社会政策論にはない細やかな情報や知見を、読者に伝えるものになったのではないかと考えている。

本書が扱った社会的排除に相当する問題と当事者について、次の表にまとめておいた。
 ①彼・彼女たちはどのような社会的機会から排除されているのか、②どのような自助努力や行政・民間の施策によって社会に包摂される道筋を歩んでいるのか、③包摂を程度・方法をどのように評価するか、④包摂に主として関わる政策上のアクター、に関して要約してある。

表：タイにおける社会的排除と包摂

問題と当事者	何からの排除か	何への包摂か	包摂の現状評価	政策アクター
①自助努力・家族戦略による社会的排除(貧困)からの脱出 包摂の施策は居留国政府				
ラオス人労働者	<ul style="list-style-type: none"> ■自国での安定した職業・就労と教育の機会 ■タイにおける法的地位、人間らしく、尊厳のある、しかも働きがいのある仕事 	<ul style="list-style-type: none"> ■ラオスにおける農村地域の開発と就労・教育制度への包摂 ■タイにおける法的包摂、適切な労働体制への包摂 	第一次: 就労・経済的安定 国家・公的制度レベル	ラオス政府、タイ政府
タイ人国際結婚定住者	<ul style="list-style-type: none"> ■自国での安定した職業・就労と教育の機会 ■日本における法的・経済的地位の長期的保障、自立の機会、地域社会からの排除 	<ul style="list-style-type: none"> ■法的・経済的地位の保障、就労支援 ■地域社会への包摂、子育てサポート、交流 	第一次: 就労・経済的安定 国家・公的制度レベル 社会政策領域レベル(教育・労働・子育て)	タイ政府、日本政府 日本の地方自治体
②コミュニティによる社会的排除(貧困・低開発)からの脱出 包摂の施策は政府の観光事業方針				
山地民とエコツーリズム	<ul style="list-style-type: none"> ■地域開発・発展からの排除、山地民への視線 	<ul style="list-style-type: none"> ■タイ観光局推進のエコツーリズムと地域開発 	第一次:モデル事業 第二次:農村各世帯の自発的参加 コミュニティレベル	タイ観光局と村人
農村女性と文化ツーリズム	<ul style="list-style-type: none"> ■地域開発・発展からの排除、女性の役割限定 	<ul style="list-style-type: none"> ■タイ観光局推進の文化・ツーリズムと地域開発、女性のエンパワーメント 	第一次 モデル事業 第二次 農村各世帯の女性の自発的参加 コミュニティレベル	タイ観光局と村人・女性

③NGO・地域行政による社会的排除(不健康な生活、危険な労働環境)からの脱出、包摂は支援機関				
ストリート・チルドレン	<ul style="list-style-type: none"> ■潜在能力を発揮する教育機会→ストリートで生きる:ストリートギャングの生き方と将来:社会構成員として政治に参加する機会からの排除/就労機会からの排除 	<ul style="list-style-type: none"> ■NGO は社会復帰を促す(学校、地域、労働) 	第一次:学校、路上の学校 第二次:労働、就労斡旋 コミュニティレベル 社会政策的には今後の課題	地域行政・学校
ゴミ収集人	<ul style="list-style-type: none"> ■安全でコストな就労機会からの排除→生計は立つがスラム在住 	<ul style="list-style-type: none"> ■ゴミ処理・環境保全政策との連携 	第一次:ゴミ収集人の調査、プラン作成 第二次:地域行政での実施 地域行政レベル	地域行政官
④社会的公共機関による社会的排除(地域コミュニティ・医療資源、就学機会欠如)からの脱出 包摂は企業・大学				
工場労働者	<ul style="list-style-type: none"> ■都市での就労は農村の地域コミュニティ・医療資源からの排除 	<ul style="list-style-type: none"> ■移動先における包括的な医療資源への包摂 ■移動先の地域コミュニティへの包摂 	社会政策領域レベル(医療)自治・地域開発レベル(市民社会参加)	タイの地方自治体(保健センター含む) 企業 市民団体、NGO/NPO
生涯学習受講者	<ul style="list-style-type: none"> ■学習機会を得られなかった人達→ノンフォーマル教育 ■高学歴を求める人達、排除よりも卓越化戦略 	<ul style="list-style-type: none"> ■包括的な意味での生涯学習社会、人的資本の開発による労働生産性を上げるという政府の方針、産業界の要請、個人の戦略 	第一次 教育行政 第二次 大学政策 国家・教育行政のレベル	タイ教育省・大学

本書の目論見がどの程度成功しているかは、読者の判断に委ねられる。よろしければ、是非ご一読願いたい。ラオスからノンカーイに働きに来ている女性たちの生活史、ストリート・チルドレンやゴミ収集人の事例など、あまり知られていない事柄も多いと思われる。

以上